
M H P 3 r d fightingハンター

へちゃ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

MHP3rd fightingハンター

【Nコード】

N7651Z

【作者名】

へちや

【あらすじ】

温泉で一躍有名なユクモ村に一人の男ハンターがきました。彼はただ温泉ツアーで温泉入りに来たら、しよんな事から狩りにレッツラGO。彼の運命やいかに。

第1話・ようこそ！温泉天国ユクモ村！

「熱い！！」

彼はそう叫びながら温泉から勢い良く立ち上がった。バシャッと飛び散る水しぶきが、近くでドリンクを売るアイルーにかかるほど勢い良く。

「だ、旦那。大丈夫ですかい？」

ドリンク売りのアイルーが驚いたように男に問いかける。

「メチャクチャ熱いじゃねーか！、俺は熱いのが苦手つつたろ！、俺はこの温泉が目的でこの「ユクモ村」に来たのに、もっとぬるくならないのか？」

と、男はドリンク売りに大声でクレームをつけた。

「しかし、他のお客様に迷惑ですニヤ。申し訳ないけど温度は変えられないニヤ。てか、熱くても我慢するニヤ。」

「なんだとお。こっちははるばる遠くからこの温泉入りになあ、来たんだぞ。」

俺はお客様だぞお！」

ドリンク売りと男の大人げない会話を聞いていた、他の客数人が迷惑そうな顔をして客同士ヒソヒソ何か言っている。

「他のお客様に迷惑ですニヤ。悪いけど出ていってもらえますかニヤ？」

ドリンク売りと男の言い合いに割って入るように番台の別のアイルーが男に言う。すると男は。

「分かったよ。熱くても我慢すればいいんだろ。」 と言うと、また文句を言いながら温泉に浸かった。

アイルー達は、ハア〜と顔をうつむけて疲れたといった様なため息をついた。一方彼は、タオルを小さくたたんで頭に乗せ、ふてくされたような顔をして静かに温泉に浸かっていた。

「熱い、出る」

数分もしないうちに、彼は立ち上がって温泉からでた。ホカホカと白い湯気を立てながら温泉の出口に向かう。

「毎度ありニヤ。」

さっきの番台のアイルーが彼にそう言った。

それを聞いてか聞かずか、彼はそそくさと温泉を出ていった。彼はタオル姿から自分の防具に着替えた。

彼の防具はフロギー一式

おもに水没林などに生息する、「ドスフロギー」という大型のモンスター素材から作られている。とても強い防具という分けではないが、彼のお気に入り防具だ。防具は多数のキズや汚れ、色あせた跡がある。かなり使い古された防具である。見た目はオレンジ色をメインとして、テングロンハットの様な帽子をかぶり、口もとは布のようなもので隠されていて、背中には大きなマントが垂れ下がっている。

武器は「ドロスポーンソード」という大型の剣を背負っている。小型の水獣の素材をベースに骨などで作り上げた一品である。

着替えが終わわり、暇潰しに何かクエストを受けよとギルドカウンターに向かう。カウンターにはクエストを受けようと数人のハンターで賑わっていた。彼と同じようにソロの者や楽しそうに談笑しながらクエストを選ぶパーティー。

「うーん。どのクエストを受けようかなあ……」

彼は人と人の間をすり抜けてカウンターでクエストを選んでいた。

すると彼の目はあるクエストに目が止まった。

クエスト名

「強襲する孤島の水流！」（ロアルドスー頭狩猟）だった。

「よし。これにしよう。丁度コイツ（ロアル）の素材欲しかったし。」

彼はカウンターのの人に話しかけようとした。「すいませ……」

までいいかけたその時、彼は気がついた。

契約金200z 所持金183zという事実。

ギルドの人が「はい。なんでしょうか？」

こちらに気がついて言葉を返してきた。

「あ…、やっぱり何でもありません」　　ハハあ」

こんなにやるせない気持ちは久しぶりだ。

「なぜこれしか無いんだ。まさかスリかあ！？」

しばらくカウンターから少し離れた場所で考えていた。　しばらくして答えが解った。　温泉に入る少し前に間違えて回復薬99個買ってアイテムBOXに送ってしまったのだ。

仕方なく回復薬を3つ売りなんとか所持金200Z越えをし、さっそくカウンターにクエストを受けに行く。

が…　　時既に遅し。

「すみません。そのクエストは先ほど他のハンターさんが受けてしまいました。申し訳ありません。」

と、ギルドの人が言った。男は諦められずこう言った。

「そのハンターは誰だ？どのハンターだ？　もう出発したのか？」
するとギルドの人は

「あちらのお方ですけど」と一人のハンターを指さした。そのハンターは背が低く、160？位の背丈、色あざやかな防具、ペッコー式に身を包み背中には、オノのような短剣を背負い。右手には小さな盾がついていた。おそらく片手剣だろうか。男はそのハンターに後ろから声をかけた。

「おい、そのペッコのハンターさん。そのちっこいアンタだよ」とするとそのハンターは振り返り彼と目があつた。

男は驚いた。

「お前、まだガキじゃねーか…」

そのハンターはまだ少年のような顔立ちで、17か18辺りにみえた。するとペッコ装備の少年はこう言った。

「僕はガキじゃないです。ちゃんとした名前があるんですけど。それよりおじさん何ですか？」「クソガキアア！　誰がおじさんジャア！、俺は二十五歳だ。おにいさんだろがぁ」

その瞬間、一気に静まる周りの話し声、集中する視線「あの…もう行ってもいいですか？」とペッコの少年が男に言った。

我にかえった男は目的を思いだし少年に持ちかける。「あのさ、そのクエスト俺も連れて行ってくれない？さっき大声出したの謝るからさ。」

すると少年は

「え？何で初対面の人と狩りに行かなきゃいけないんですか？」
男は言った。

「そのクエスト俺も受けようと思ってただけど、丁度アンタに先こされたんだよ。なあ、これも何かのえんだろ、頼むよ。」

えー、と少し考え込む少年にさらにたたみかける。

「もちろん俺は途中で裏切らないし。あ！そうだ。報酬で回復薬あげるからさあー、お願いしますよ。」

すると少年はこう言った。「分かったよ。じゃあこの狩りだけね。」

それともうひとつ。僕の名前はガキじゃない。僕はグランて名前なの。」

すると男は

「ありがと。あと俺からも一つ。俺はおじさんじゃない。俺はビイルてゆうんだ。よろしくな！」

第2話・強襲！ロアルドロスにご用心！

「着きましたよ。ちよつと！、起きてくださいよ。ヴィルさん！」
暖かい日ざしと見知らぬ声、いや。かすかに聞き覚えのある声が馬車の中で気持ちよさそうに寝ているヴィルを起こした。

「ん？どこだここ…、てか誰アンタ？」

と、半開きの目でグランに問いかけた。あきれたようにグランが言う

「何寝ぼけた事言ってますか。ここは孤島ですよ。ほら、早く馬車から降りてベースキャンプに向かいますよ。」

グランはそう言って馬車から降りてヴィルを見つめた。するとヴィルは出発前のことを思いだしたように。

「あ。ちよつと待つてくれよ。」

と、グランの後に続いて馬車から降りた。

ベースキャンプに向うと言ったが、すぐそこなのでグランはスタスタとヴィルを待たずに歩きだした。

「待て待て待て！！！」

後ろからヴィルが大声出して、ドタドタ追いかけてきた。ヴィルは歩いていったグランの横についた。

「ちよつと待つてくれよ。置いてくなんて酷いぜ。」と言いながらグランの肩を軽く叩いた。

グランはチラッとヴィルの方を少し見て、また前をみた。少し気まぐずい雰囲気になる。しかしヴィルが話しかける。

「なあグラン。怒ってるのか？」

「別に怒ってないですけど。」とのグランの返事にヴィルは。

「せっかく一緒に狩り来たんだから、仲良くなるうぜ！」

ヴィルは明るくグランに言った。「ヴィルさんはなんでハンターやっつてんですか？」

グランがヴィルに話しかけた。

突然の質問にヴィルは答える。

「親父がハンターだったんだ。まだ俺がガキだった頃によく狩りに連れて行ってもらったよ。」

懐かしそうにヴィルが言った。それを聞きグランは。「お父さんの後取りでハンターやってるんですか…」「いや…」

グランの話をさいぎるようにヴィルが言った。

「後取りじゃないんですか？」　グランは横目にヴィルに言った。

「かたきうちだよ、親父のかたきをうつためにハンターやってるんだよ。」「かたき？」

「そう、ずっと昔の話しなだけだな、俺をかばって親父は死んだ。長話しになるから今度話すよ。」

今までニタニタ笑っていたヴィルの顔が、どこか少し悲しげだった。「別に話さなくてもいいですよ。」

グランはそう言う足早にベースキャンプに向かった。

ベースキャンプに到着した二人はそれぞれ自分の装備やアイテムなどの整理、準備をしていた。

準備がすんだ二人は早速ロアルドロスの搜索に向かうことにした。

「どうやって探すか？」

ヴィルがグランに問いかけるとグランは答えた。

「手分けして搜索しましょう。先に見つけたほうがペイントボールをつけましょう。」

グランの提案にヴィルがうなずく。

「了解。」ベースキャンプの前で二人は別の道に進んだ。

「ロアルドロスって水獣だろ？　じゃあ水辺にいるだろ。」

ヴィルは水辺を目指して進み始めた。

しばらくして小型のモンスターがちらほら見かけるようになった。ヴィルは小型モンスターには目もくれず、ただロアルドロスの搜索にせんねんした。ロアルドロスを探し始めて時間だけがどんどん経過していく。

「どこだ…ロアルドロスは、出てこいよ…」

歩き疲れたヴィルは力なくそう言つと、近くの大きな岩によりかかった。

足下にはルドロスが3頭こちらにむかつて吠えていた。と。そのときヴィルは異変に気がつく。

まず、岩だと思つていた物は黄色く、すこし濡れている。そして足がはえていた。「!!!!!!」

ヴィルがそれに気がつくと同時に巨大な尻尾がヴィルの腹部に強く叩きつけられた。

不意うちの一発に、腹部の強烈な痛みとともに、胃酸が込み上げてきた。

「ヴハッッ」

痛みに思わず声がでる。

我にかへつたヴィルは、その「物体」から少し距離をとつた。その正体が探していた獲物だと分かると同時に、背中に担いだ大剣を両手にとりかまえた。「グシュウ!!!!」

ロアルドロスが唸り声をあげた。つぎの瞬間周りにいたルドロス達がヴィルに襲いかかる。

ヴィルはルドロス達の攻撃を回避し、ロアルドロスとの距離をつめる。

ヴィルはグランとの作戦を思いだし、ペイントボールをロアルドロスにすれ違いざまに素早く当てた。

ペシャッとおとをたててペイントボールはロアルドロスに当たってはじけた。

ペイントボール独特の匂いが周囲に広がる。

「ペイントボールは当てたぞ、さっさと来ないと終わっちまうぞ」ヴィルは心の中でそう呟いた。

ヴィルはこれまでロアルドロスを何頭か狩ったことはある。少し油断していたがヴィルは気がつく。

今回の獲物は大物だと。

平均サイズよりも一回り大きい。

「面白い。手かげんは要らんだろ。」

ヴィルは剣を握る手をギュツとかるく握りなおしてロアルドロスに向かつて行った、大剣は重く、かまえたままだと走れない。

ゆっくり距離をつめていく。するとロアルドロスがヴィルに向かつて勢いよく迫ってきた。

くるっと体を丸めるようにロアルドロスの攻撃を回避してロアルドロスの体の側面につき、大剣を振りかざした。

そしてまた回避してロアルドロスの後ろにぬけた。

また攻撃をかけようといったん大剣をしまおうとしたら、ロアルドロスは尻尾を大きく振った。

「ガバツ」

尻尾はヴィルの背中に当たった。

よろけながらヴィルは振り返り剣をぬいた。

またロアルドロスが突進してくる。一瞬のうちに回避が間に合わないと考え大剣を横にかまえガードするかまえに入った。

足に力をいれ、ふんばり、衝突にそなえる。

ロアルドロスが剣にぶつかる。その瞬間、視界が一瞬真っ白になる。しかし衝突の衝撃はない。

「なんだ？」

ヴィルがロアルドロスの方を見ると、ロアルドロスは混乱して狂ったように吠えている。周りの小型モンスターも。

「閃光玉か！」

ヴィルが後ろを振り向くとそこには、見覚えのあるペッコ装備の少年。

グランがいた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7651z/>

MHP3rd fightingハンター

2011年12月25日17時46分発行